

NLP2021 論文投稿用スタイルガイドおよびサンプル原稿

言語太郎
言語大学処理学部
taro@example.com

言語花子
言語大学処理学部
hanako@example.com

1 はじめに

この文書は、言語処理学会年次大会への投稿論文を作成する際のインストラクションである。NLP2021 より、賞選考コストの削減の観点から、投稿論文のフォーマットを規定する。そのため、規定のフォーマットを満たす年次大会論文投稿用スタイルファイル (nlp2021.cls) を配布する。この文書自体が当該年次大会論文投稿用スタイルファイルを用いて作成されている。よって、この文書を参考に投稿論文の原稿を作成することを推奨する。

1.1 基本設計

LaTeX 版 NLP2021 文書クラスは W3C により策定されている『日本語組版の要件』[1] に準拠することを目指す jreq クラスをベースにしている。ただし、本文書クラスでは紙面スペースの都合上、余白値をかなり詰めるように設定している。例えば、行間は外国人参政権のようにルビを振れる最小限の余白に設定してある。

NLP 分野の論文では、単純なテキストのみならず、しばしば数式

$$P(B | A) = \frac{P(A | B)P(B)}{P(A)} \quad (1)$$

や箇条書き

- 第 1 の項目
- 第 2 の項目

といった構造も用いられるが、LaTeX 版ではこれらもよく知られた文書クラス (例えば jsarticle 等) と同様のシンタックスで利用できる。

本文書クラスの仕様の詳細については README-latex.md を参照されたい。

1.2 Word 版テンプレート

Word 版テンプレートは、前述の LaTeX 用に定義された NLP2021 文書クラスに準拠して作成されて

いる。Word 版でも、数式や箇条書きなどは Word 上の機能を用いて挿入することができる。

LaTeX 版文書クラスでの禁止事項および Word 版で投稿される論文が満たすべき規定については、2 節および 3 節に詳述する。

1.3 クレジット

LaTeX 版のクラスファイル (nlp2021.cls) は、東京大学宮尾研究室 朝倉卓人氏のご厚意により年次大会用に提供していただいた。

また、Word 版のテンプレートは LaTeX 版のフォーマットに従って理化学研究所 吉野幸一郎氏により作成していただいた。

2 投稿論文の必須要件

投稿論文に関する規定には、必ず満たさなければいけない「必須要件」と、賞選考のために満たすことを前提とする要件の 2 種類がある。本節では、必ず満たす必要のある「必須要件」について述べる。

1. 原稿は本文は 4 ページ以内、本文と参考文献を含めて 5 ページ以内、付録は独立した 1 ページ以内
2. 各ページの余白は上下 3cm、左右 2cm 以上

1 に関しては、本文と参考文献を合わせて最大で 5 ページの原稿を投稿することができるが、参考文献がどんなに少量であったとしても、5 ページ目に本文が入ってはいけないことを意味する。また、本文および参考文献とは別に、著者が望む場合は付録 (Appendix)¹⁾ を 1 ページ分、原稿につけることができる。つまり、最大で 6 ページ分の原稿を投稿することができる。

2 に関しては、投稿論文に含まれる全てのページに対して余白の規定を満たす必要がある (付録も含む)。

本節記載の 1 および 2 の要件を満たしていない場

1) 付録に関しては、3.6 節を参照のこと。

合は、発表取り消しとなる可能性がある。投稿時には十分に気をつけて投稿すること。軽微かつ容易に修正可能な場合は、プログラム委員会で予告なく原稿を修正する可能性がある（その場合は発表取り消しにはならない）。

3 投稿論文の体裁

2 節冒頭で述べた通り、論文の体裁に関する規定には、必ず満たさなければいけない「必須要件」と、賞選考のために満たすことを前提とする要件の 2 種類がある。本節では、「賞選考のために満たすことを前提とする要件」を述べる。

賞選考コストの削減の観点から、投稿論文のフォーマットを規定する。その詳細を本節に記載する。規定フォーマットに明らかに従っていない場合は、予告なく優秀賞・若手奨励賞などの一部の賞の選考過程から除外されることがある。

ただし、賞選考のコスト削減の観点から生じた施策なので、本節に記す規定フォーマットを満たさない原稿であっても、前節の必須要件が満たされていれば発表自体が取り消されることはない。

3.1 本文

LaTeX 版 文書クラスが定義する以下についての変更は禁止とする。

- 用紙サイズ
- フォントサイズ
- 欧文フォント (利用するフォントによって文字数に異なりが生じるため)
- 余白の大きさ
- 行間、行数、文字数（特に `baselinestretch` を変更しないこと）

Word 版 LaTeX 版で定義された文書クラスと同等のテンプレートを実現するため以下のような定義を行っている。これらを変更することは禁止とする。

- 用紙サイズは A4、組版は 2 段組とする。
- フォントサイズは以下のように定める。
 - 論文表題: 16pt
 - 著者名: 10-11pt
 - 大見出し: 14pt
 - 中見出し: 12pt
 - 小見出し: 11pt
 - 本文: 10pt

- その他本文中の数式などの文字: 10pt
- 図表等のキャプション: 10pt
- 上記以外のクラス、例えばアルゴリズムなどを記述する場合の文字: 10pt 以上

- 論文の余白は以下の通り定める。

- 上下: 3cm
- 左右: 2cm

- 行数は 45 行、各行の文字数は全角 23 文字
- ルビを振る場合、行間を固定値とし、その値を 14.9pt とする。設定する場合、「段落」→「インデントと行間の変更」→「行間」から指定する。

3.2 Write in English

This paragraph shows an English sample. There is no problem to prepare your manuscript in English. If you write on LaTeX, please use the distributed style file with "english" option:

```
\documentclass[
    platex, dvipdfmx, english]{nlp2021}
```

Any changes on the style file (.cls) are prohibited. If you write on Microsoft Word, please use the distributed sample file without changing its layout. Using “Times New Roman” is suggested.

なお英語での原稿作成について、LaTeX 版の場合は配布するスタイルファイルを用いて記載すれば問題ない。Word 版の場合は配布テンプレートを用いて、レイアウト等については変更しないこと。本文は、スタイルファイルで規定される通り Times New Roman で記載のこと。

3.3 図、表、例文等

図、表、例文等、本文とは独立に表記される領域における文字サイズも、基本的には本文と同じ 10pt を推奨する。

ただし、図や例文などは、別のツールで作成したオブジェクトを原稿に埋め込むことなどを鑑みると、中の文字の正確なサイズを知るのは難しいので図中のフォントサイズは規定しない（10pt 以下の文字サイズがあっても規定違反とはしない）。ただし、A4 印刷で読める大きさは担保するように留意すること。

表に関しても、情報を多く記載する必要がある場合を鑑み、`\small` (9pt) 相当のフォントサイズまでは必要であれば利用しても良いこととする。また、`\tabcolsep` などを使って各セルの横方向を詰め

ることは許容する。ただし、詰めすぎて読みにくくならないように留意すること。

3.4 参考文献

本文の直後に、参考文献のセクションを設け、本文の中で参照した参考文献の詳細を列挙する。本文中の参照は [1] や [2, 3] といった数字で表記し、その数字に合わせて参考文献を記載することを推奨する。ただし、参考文献セクションの体裁については厳密に指定はしない。著者の裁量で独自の参考文献のスタイルを用いることができる。年次大会の推奨設定は以下とする。

```
\bibliographystyle{junsrt}
```

```
\bibliography{j_yourrefs}
```

また、参考文献が 1 ページに入りきらない場合、参考文献は独自のスタイルを用いて良いので、フォントサイズを小さくするなどして対応すること。

```
\renewcommand{\bibfont}{\footnotesize}
```

LaTeX 版の本文で参考文献を参照する際には、`\cite{Article_01}` といった形式で参照する。著者の名前は、略記はせずにフルネームを記載することを推奨する。

以下、参照の参考例である。

- 論文誌の参照例 [2]
- 本の参照例 [3]
- 国際会議の参照例 [4]
- 技術報告の参照例 [5]
- Web ページの参照例 [6]

Word 版では「参考資料→引用文献の挿入」を利用することを推奨する。引用の方法は、ISO 690: 参照番号を利用する。ただし、適切に番号の対応が取られていれば Word 版引用文献の機能を利用することは必須ではない。

3.5 脚注

補足情報を入れるために脚注 (footnote) を利用することができる。²⁾ 脚注はページの下部に 9pt で表記する。また、脚注は論文全体で 1 から番号をつけ、閉じ括弧などの記号を伴って、どの脚注がどこに対応するか明確にわかるようにする。脚注は本文と水平線 (横線) で分割される。³⁾ なお、Word 版におい

2) 脚注の例である。

3) ツールを参照する際に脚注に URL のみで参照する事例が見られるが、ツールに紐づく文献などを積極的に参考文献にして追加することを推奨する。

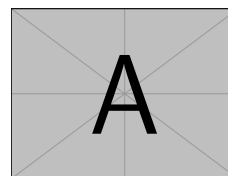


図 1 何らかの図

ては「参考資料→脚注の挿入」から脚注を利用することができるが、本テンプレートが利用している通り、脚注箇所を明確にするためアラビア数字以外の文字を脚注記号として利用することを推奨する。

3.6 付録 (Appendix)

本文とは別に付録 (Appendix) を 1 ページつけることができる。付録は、追加の実験結果や詳細な実験設定、式の証明などを著者が記載したい場合に利用することを想定しており、基本的には付録をつける必要はない。

付録に関しては、本サンプルで利用している年次大会指定のフォーマットに従う必要はない。ただし、必須要件に入っている上下左右の余白に関しては規定を満たす必要がある。本文領域に関しては、どのような形式で付録を作成するかは著者の裁量による。

付録に記載の内容は、賞選考時には考慮されない。つまり、賞選考の審査員は賞選考時に付録を読まないことを前提としている。よって、本文から付録を参照する際には、その参照がなくても本文内で議論が完結するような書き方が必要である。逆に付録の情報に基づいた議論が本文中であったとしたら、それは審査で不利に判断される可能性がある。

投稿時には、本文および参考文献に続けて付録を配置し、単一の PDF として投稿する必要がある。また、付録は付録だけで独立した 1 ページで構成する。つまり、本文や参考文献のページ数が上限に達していても、付録は独立した 1 ページが上限となる。単一原稿として作成している場合は、付録の直前で必ず改ページをおこない、本文や参考文献とは独立したページとなるように注意する。

4 参考情報

本節には、その他、原稿執筆に有益と考えられる情報を記す。

表 1 適当な表

日本語	Japanese	ほげほげ	ふげふげ
英語	English	hogehoge	fugefuge

表 2 適当な表 (small バージョン)

		データ 1			データ 2		
	設定	Pre.	Rec.	F1	Pre.	Rec.	F1
Model1	config1	23.04	30.11	25.6	23.04	30.11	25.60
Model2	config1	23.04	30.11	23.04	23.04	30.11	23.04

4.1 図の挿入

図のキャプションは図の下につける。図 1 は実際の挿入例である。

LaTeX 版 図の挿入は通常 `graphicx` パッケージによって行う (図 1 参照)。クラスオプションにワークフロー (`dvipdfmx` 等) を指定していれば、各パッケージを読み込む際に何度も同じオプションを指定する必要はない。

Word 版 図の挿入は挿入 → 図の機能によって行う。図を挿入する場合、挿入した図を選択した際に表示される「図ツール」の「文字列の折り返し」から、「上下」を利用する。また、「参考資料」から「図表番号の挿入」を選択し、図表番号と同時にキャプションを付与する。

4.2 表の挿入

図とは異なりキャプションは表本体の上に付ける。表 1 は実際の挿入例である。表 2 は表 1 のフォントサイズを `\small (9pt)` に変更した例である。

LaTeX 版 表は `\begin{table}...\end{table}` 環境を使う。

Word 版 表組みも Word の「挿入」から表を追加できる。また、図と同様に「参考資料」から「図表番号の挿入」を選択し、図表番号と同時にキャプションを付与する。なお、Word 版においてはフォントサイズを `9pt` としてもあまり大きく余白を詰めることはできない。

4.3 色つけ

投稿論文の原稿への色つけに関しては特に規定を設けない。図表、本文も含めて、読者がより理解しやすいと著者が判断するのであれば、著者の裁量で自由におこなってよい。

4.4 hyperref

論文内の参考文献、式、セクション等へのハイパーリンクを埋め込みたい場合は、著者の裁量で自由におこなうことができる。

4.5 Overleaf

原稿執筆時に Overleaf を利用して作成する人が多いと思われるが、特定のツールの使い方を年次大会で公式にサポートはしない。ただし、利用時の TIPS として、年次大会配布のファイルを置いただけでは日本語環境が整っていないという意味でコンパイルできない場合がある。その場合は、`latexmkrc` を用意し、そこに日本語用の設定を記載する。詳細はインターネットで検索すれば多くの情報を見つけれられるので、そちらに譲る。コンパイラは LaTeX を選択する。

5 ダミーテキスト

本節は以下ダミーテキストである。

5.1 サブセクション 1

このサブセクションはダミーテキストである。

5.1.1 サブサブセクション 1

パラグラフ ダミーテキストである。

6 おわりに

投稿論文に関する規定には、必ず満たさなければいけない必須要件 (2 節) と、賞選考のために満たすことを前提とする要件 (3 節) の 2 種類がある。

必須要件は、論文のページ数と余白に関する規定である。必須要件を満たさない論文は発表取り消しの場合もある。一方、賞選考のために満たすことを前提とする要件は、賞選考コスト削減が主な理由であり、満たされていなくても発表が取り消されることはない。ただし、優秀賞・若手奨励賞などの一部の賞の選考過程から除外されることがある。

年次大会論文投稿用スタイルファイルを使った執筆がどうしても自己解決できない場合は、プログラム委員会まで問い合わせること。

参考文献

- [1] W3C 日本語組版タスクフォース. 日本語組版の要件 (日本語版), (2020-11 閲覧). <https://www.w3.org/TR/jlreq/>.

- [2] FirstName LastName. Title of the article. *Journal of Natural Language Processing*, Vol. 13, No. 1, pp. 251–258, 2006.
- [3] FirstNameA LastNameA, FirstNameB LastNameB, FirstNameC LastNameC, and FirstNameD LastNameD. *Title of The Book*. The Association for Natural Language Processing, 1988.
- [4] 著者氏名 1, 著者氏名 2, 著者氏名 3. 論文タイトル. プロシーディングスの名前, 1986.
- [5] 著者氏名 1, 著者氏名 2, 著者氏名 3, 著者氏名 4. 技報タイトル. Technical report, 出版者, 1985.
- [6] 著者氏名. ホームページタイトル, 2017. <http://www.pluto.ai.kyutech.ac.jp/NLP/>.

付録のサンプル

A 付録

「筒棒め、うちらなんかいくら大きくたって腹の足しになるもんか」
彼は火に肝臓に降った様子で、寒竹をそいだような耳をしきりとびく付かせてあららかに立ち去った。吾輩が車屋の黒と知己になったのはこれからである。
その後吾輩は度々黒と邂逅する。邂逅する毎に彼は車屋相当の気焰を吐く。先に吾輩が耳にしたという不徳事件も実は黒から聞いたのである。
或る日例のごとく吾輩と黒は暖かい茶臼の中で寝転びながらいろいろ雑談をしていると、彼はいつもの自慢話をさも新しそうに繰り返したあとで、吾輩に向って下のごとく質問した。「御めえは今までに鼠を何匹とった事がある」智識は黒よりも余程発達しているつもりだが脳力と勇氣とに至っては到底黒の比較にはならないと覚悟はしていたものの、この間に接したる時は、さすがに極りが善くはなかった。けれども事實は事実で詐る訳には行かないから、吾輩は「実はどうだろうと思ってまだ捕らない」と答えた。黒は彼の鼻の先からびんと突張っている長い髭をびりりと震わせて非常に笑った。元来黒は自慢をする丈にどこか足りないところがあって、彼の気焰を感じたように咽喉をころころ鳴らして謹聴していればなほはだ御しやすい猫である。吾輩は彼と近付くなってから直にこの呼吸を飲み込んだからこの場合にもなまじい己れを弁護してますます形勢をわるくするのも愚である、いっその事彼に自分の手柄話をしゃべらして御茶を濁すに若くはないと思案を定めた。そこでおとなしく「君などは年が年であるから大分とったろう」とそそのかして見た。果然彼は壁壁の欠所に啖喊して来た。「たんとでもねえが三四十はとったろう」とは得意気なる彼の答であった。彼はなお語をつづけて「鼠の百や二百は一人でいつでも引き受けるがいたちってえ奴は手に合わねえ。一度いたちに向って酷い目に逢った」「へえなるほど」と相踵を打つ。黒は大きな眼をばちつかせて云う。「去年の大掃除の時だ。うちの亭主が石灰の袋を持って縁の下へ這い込んだら御めえ大きなたちの野郎が面喰って飛び出したと思ひねえ」「ふん」と感心して見せる。「いたちってけども何鼠の少し大きいぐれえのものだ。こん畜生って気で追っかけてとうとう泥溝の中へ這い込んだと思ひねえ」「うまくやったね」と喝采してやる。「ところが御めえいざってえ段になると奴め最後っ屁をこきやがった。臭えの臭くねえのってそれからってえものはいたちを見ると胸が悪くならあ」彼はここに至ってあたかも去年の臭気を今なお感ずるごとく前足を掲げて鼻の頭を二三遍まで廻わした。吾輩も少々気の毒な感じがする。ちっと鼠気を付けてやろうと思って「しかし鼠なら君に睨まれては百年目だろう。君はあまり鼠を捕るのが名人で鼠ばかり食うものだからそんなに肥って色つやが善いのだろう」黒の御機嫌をとるためのこの質問は不思議にも反対の結果を呈出した。彼は啗然として大息していう。「考げえるのとつまらねえ。いくら稼いで鼠をとったって――てえ人間ほどふてえ奴は世の中にいねえぜ。人のとった鼠をみんな取り上げやがって交番へ持って行きやあがる。交番じゃ誰が捕ったか分らねえからそのたんびに五銭ずつくれるじゃねえか。うちの亭主なんか己の御蔭でもう志門五十銭くらい儲けていやがる癖に、碌なものを食わせた事もありやしねえ。おい人間てものあ体の善い泥棒だぜ」さすが無学の黒もこのくらいの理窟はわかると見えてすこぶる怒った容子で背中の毛を逆立てている。吾輩は少々気味が悪くなったから善い加減にその場を胡魔化して家へ帰った。この時から吾輩は決して鼠をとるまいと決心した。しかし黒の子分になって鼠以外の御馳走を獵ってあるく事もしなかった。御馳走を食うよりも寝ていた方が気楽でいい。教師の家にいると猫も教師のような性質になると見える。要心しないと今に胃弱になるかも知れない。